

『歎異抄』のおはなし①

『歎異抄』という書物は、これまで実に多くの人々を魅了してきました。『歎異抄』を愛読書としたり、『歎異抄』に救われたという人は、これまで数限りありません。

哲学者で、『善の研究』で知られる西田幾多郎先生は、「他の書物が一切なくなっても、自分は『臨濟録』と『歎異抄』さえあれば生きていける」と語られたというのは有名な話です。

禅を世界に広めた鈴木大拙先生も、「親鸞聖人の思想を知るには『教行信証』などいらない、『歎異抄』だけあればいい」と言われたそうです。

劇作家の倉田百三が大正時代に書いた『出家とその弟子』は親鸞聖人と息子の善鸞そして唯円を描き、『歎異抄』の内容の一部を戯曲にしたものです。

本屋さんでも、『歎異抄』の解説書は実にたくさん店頭で並んでいます。先月は、NHKのEテレ「100分de名著」という番組でも『歎異抄』が再放送されていました。

『歎異抄』は今からおよそ730年前に書かれたといわれていますが、これは親鸞聖人ご本人が直接書かれた書物ではありません。親鸞聖人をじかに知る「面授」の人物によって、「聞き書き」として書かれています。

実は仏教の経典もキリスト教の新約聖書も、聞き書きです。

その教えに感銘を受けた人が筆を執って、深く心に響いた言葉を書き記したことから、多くの人々を惹きつける力を持つのではないかと思います。

それでは、『歎異抄』は一体だれが書いたのでしょうか？

過去には様々な説があり、いろいろな人の名前が挙げられました。

- ① 覚如説：親鸞聖人のひ孫で本願寺三世である覚如上人が書かれたとする説
覚如上人が書かれた『口伝鈔』などの記述と『歎異抄』の言葉が部分的に重なる
江戸時代初期に見られたが、覚如上人は親鸞聖人の面授ではないため後に否定された
- ② 如信説：親鸞聖人に義絶された善鸞の子で親鸞聖人の孫にあたる如信上人によるとする説
如信上人は京都での幼少時に祖父の親鸞聖人から直接教えを授かった
江戸時代中期から大正時代末期に見られた
- ③ 唯円説：親鸞聖人の晩年の弟子だった河和田の唯円が書いたとする説
『歎異抄』第9条と第13条に「唯円房」という名前が見られる

江戸時代中期（如信説の約 60 年後）から現代に至る

この三人がかつて挙げられましたが、現在では唯円が書いたという説に落ち着いています。

唯円がどのような人だったかについても諸説ありますが、唯円に関わる直接的な資料はほとんど存在しないようです。

主に次の二つの説が知られており、学者によってさまざまなようです。

- ① 茨城県の親鸞聖人の信者・大部おおぶの平太郎の弟、平次郎の奥さんが親鸞聖人の教えを熱心に聞きに行っていたのがご縁で親鸞聖人の教えを聞きに行くようになり、この平次郎が後に唯円と言われるようになったという説
- ② 江戸時代に書かれた『大谷遺蹟録』おおたにいせきろくという本には唯円が建てた茨城県の報仏寺の由来が書かれており、それによると、唯円は親鸞聖人の末娘である覚信尼かくしんにの二番目の夫、小野宮おのみや禅念ぜんねんが覚信尼と結婚する前に生まれた連れ子であるという説

『歎異抄』という書名は「異議・異なりを歎く」という意味です。

唯円の眼から見た親鸞聖人の姿が語られ、唯円の筆を通じて親鸞聖人の言葉が綴つづられているのが『歎異抄』です。

『歎異抄』には親鸞聖人の語録とその解釈、そして当時はびこっていた異端への批判が書かれています。

文暦元年（1234）前後に親鸞聖人が茨城から京都に戻ってしまわれると、親鸞聖人の教えはあらぬ方向に発展し、様々に分派して、中には間違った教えを信じる人も現れました。この頃には、『歎異抄』の筆者とされる唯円は、まだ 13 歳頃の子供だったと推定されます。

その後唯円は、報仏寺の寺伝によると仁治元年（1240）、茨城県水戸市河和田町に報仏寺を建てて開基となります。

親鸞聖人は、当時の間違った教えを正すために自分の名代みょうだいとして息子の善鸞ぜんらんを関東に送りますが、聖人の意に反して、善鸞が関東の混乱をいっそうひどくしてしまいます。

父の教えにそむき、誤った法門を説いたことから、親鸞聖人は康元元年（1256）、84 歳の時に、息子の善鸞を義絶せざるを得なくなります。

善鸞が異義を説いた時、唯円をはじめとする東国門徒が京都の親鸞聖人を訪ねて教えを乞うのですが、これは唯円が 35 歳頃のことであったと推察されます。ですから唯円が親鸞聖人から直接教えを授かったのは、親鸞聖人が晩年に京都で過ごされていた頃だと思われます。

親鸞聖人が弘長 2 年（1262）に 90 歳で京都の地で亡くなられた時、唯円は 41 歳でした。親鸞聖人が亡くなった時に唯円が親鸞聖人の枕元まくらもとにいたという記録は残っていないようです。

唯円は文永 11 年 (1274)、53 歳の時にも上洛して、河内^{かわち}で親鸞聖人の弟子である慶西^{きょうさい}に会い、彼の勧め^{しもいち}で大和・吉野郡の下市にある秋野川のほとりに立興寺^{りゅうこうじ}という寺を造り、そこで教えを広めたといひます。その後唯円は一時関東に戻ったのち、正応元年 (1288) に再上洛して覚如上人に会っていることが、覚如上人の次男の従覚が書いた覚如上人の伝記、『慕帰絵詞』^{ぼきえことば}に記されています。この時に唯円から覚如上人に伝えられたと思われる内容が、覚如上人が書いた『口伝鈔』^{くでんしょう}にも記されているため、この時、唯円は覚如上人に『歎異抄』を見せて、その翌年に亡くなったのではないかとする説もあります。

しかし河和田の報仏寺には開基である唯円のお墓がなく、お墓は奈良県吉野^{りゅうこうじ}の立興寺という本願寺派のお寺にあります。

唯円は、親鸞聖人が亡くなってから 27 年後、正応 2 年 (1289) 68 才の時に奈良の吉野で亡くなりました。『歎異抄』の後序によると、『歎異抄』は唯円の晩年に書かれたらしいことがわかりますから、『歎異抄』が書かれたのは親鸞聖人が亡くなられてから 27 年以内ということになります。

『歎異抄』は全体としてはとても短い書物で、原稿用紙にすれば 30 枚くらいの量しかないそうですから、この短い文章で浄土真宗の教えをすべて理解できるというものではありません。このため親鸞聖人の教えを代表する著作であるとはいえ、『歎異抄』を読んで、それだけで親鸞聖人の教えを理解したと思うのは間違いです。しかしそれでも時代を超えて現代まで読み継がれてきているのが『歎異抄』であり、日本の宗教史上稀に見る卓越した書物であることは言うまでもありません。短いからといって侮^{あなど}るととんでもなく、とても深い思想が述べられています。

『歎異抄』の筆者による原本は存在せず、写しだけがいくつか残っています。その中で最も有名で信頼できて、最も古いとされるのが、西本願寺所蔵で本願寺八代目の蓮如上人が書き写されたものです。

『歎異抄』は本願寺の蔵の中で長い間しまわられていて、宗門の学者の間でも、その存在をあまり知られていなかったそうです。江戸時代になってから真宗学者たちが『歎異抄』の解説書を書くようになりますが、それでも今と比べると、あまり多くの人に知られる存在ではありませんでした。それが明治時代になって、東本願寺の僧で東本願寺の改革を行った清沢満之^{きよざわまんし}が『歎異抄』に注目してから広く一般の人々に知られるようになり、暁鳥敏^{あけがらすはや}、佐々木月樵^{ささきげっしょう}、曾我量深^{そがりょうじん}、金子大栄^{かねこだいえい}、近角常観^{ちかづみじょうかん}などといった清沢満之の弟子たちが、『歎異抄』を世間に普及させていくことになります。

『歎異抄』の構成は以下のようになっており、前半の親鸞の語録と後半の唯円の歎異の二部に大きく分けられます。そして序文が三カ所に入ります。

序文が三つ入るのは、親鸞聖人が書かれた『教行信証』^{なら}に倣ったのではとする説があり、前序の冒頭の「竊

(ひそかに) という字も、『教行信証』の序文と同じ漢字を使っています。

- ・序 (前序・総序) …『歎異抄』執筆の理由
- ・親鸞の語録 (師訓篇) (第 1 条～第 10 条) …親鸞聖人のお言葉
- ・序 (中序・別序) …「異なりを歎く」趣旨、第 11 条以降の序文
- ・唯円の歎異 (歎異 (異義) 篇) (第 11 条～第 18 条) …異義の批判
- ・結文 (後序) …述懐・おわりに (筆者の思い)
- ・流罪記録 (付録) …「承元の法難」による流罪の記録
- ・蓮如上人の奥書

第 1 条～第 10 条の師訓篇は、それぞれ第 11 条～第 18 条の歎異篇に対応して述べられており、後半の歎異の部分は、前半の親鸞語録に対応する異端への批判となっています。

承元の法難とは、法然上人の吉水教団が既存仏教教団から弾圧され、後鳥羽上皇が熊野御幸中に、法然上人の弟子である安楽と住蓮が開いた念仏集会で後鳥羽上皇の女官である松虫と鈴虫が出家し、また御所に安楽と住蓮を泊めたことを後鳥羽上皇が激怒し、専修念仏の停止と法然上人の門弟 4 人の死罪、法然上人と親鸞聖人ら中心的な門弟 7 人が流罪に処された事件のことです。

前置きが長くなりましたが、今日は早速、前序ともいわれる序文を読みます。

冒頭のこの序文だけは漢文で書かれています、ここでは漢文書き下し文から読みたいと思います。

書き下し文は、基本的に主に金子大栄先生校注の岩波文庫版を元にしました。

前序は大きく三つの部分に分けられますが、ここには唯円がこの『歎異抄』を書いた理由が簡潔に書かれています。

【前序】

① ひそかに愚案をめぐらして、ほぼ古今を勘ふるに、先師の口伝の真信に異なることを歎き、後学相續の疑惑あることを思ふ。

(現代語訳)

ひそかに、私なりにつたない思いをめぐらして、親鸞聖人がおいでになった頃と今とを比べてみますと、この頃は、親鸞聖人から直接お聞きした真実の信心とは異なる教えが説かれていて、歎かわしいことです。これでは、後の者が教えを受け継いでいくにあたり、さまざまな疑いや惑いがおきるのではないかと思います。

「ひそかに」は、静かに心をひそめて、という意味です。「愚案」は、愚かであつた私の考えです。「ほぼ」は大体、あらましという意味で、「古今」は、親鸞聖人の生きておられた頃と今唯円が活着ている時代を、という意味です。「勘うる」は、比べて考えることです。「先師」は亡くなられた師匠で、親鸞聖人です。「口伝」は、口伝えに直接語り聞いた、という意味です。「真信」は真実の信心です。「後学相統」は、自分より後の世の人々が、教えを受け継いでいくことです。

冒頭のこの部分は、唯円自身が自分のつたない思いをめぐらして、親鸞聖人が生きておられた頃と今の唯円の時代とを比べて考えてみたときに、親鸞聖人が亡くなった後、弟子や門弟たちの間に真実の信心とは異なる異端が多く生じたことを歎いたものです。

『歎異抄』というタイトルは、この「異なることを歎き」という部分からつけられました。

このままでは後学の者たちが疑ったり迷ったりしないかを心配する、唯円の心情が吐露されています。

② さいわい 幸 うゑん に有縁 ちしき の知識 よ に依らずば、いかでか いぎょう 易行 いちもん の一門 い に入る え ことを得んや。
まった 全く じけん 自見 かくご の覚悟 もつ を以て たりき 他力 しゅうし の宗旨 みだ を乱ることなかれ。

(現代語訳)

幸にも縁あって、まことの教えを示してくださるよい師匠の導きに出会うことがなかったなら、どうしてこの念仏して救われる易行の道に入ることができるでしょうか。

決して、自分勝手な考えにとらわれて、阿弥陀さまに救っていただく本願他力の教えのかなめを乱すようなことがあってはなりません。

「有縁」とは、因縁やご縁のある、という意味です。「知識」は「善知識」ともいい、真実の教えを示してくれる人のことです。「易行」というのは、易しい行、すなわちすべての人を救うという阿弥陀如来の本願を信じ念仏を称えることによって救われる他力の仏道のことで、厳しい修行によって悟りを開こうとする「難行」に対する言葉です。

「自見の覚悟」とは、自分一人の勝手な所見だけで決めてしまうこと、独断的な解釈をすることです。「他力」とは、阿弥陀如来の本願のお力のことで、自分の力で悟りを開こうとする「自力」に対する言葉です。すべての人を救うという如来の本願にすべてをおまかせすることによって本当の救いが得られるという教えのことです。「他力」の「他」というのは阿弥陀如来のことをいいます。「乱ること」は、思いまちがうこと、ゆがめることです。

ここでは、唯円自身が幸いにも親鸞聖人というまことの「知識」に出会えたからこそ、他力念仏の教えを受け取ることができた喜びが記されています。善き師・善き指導者としての親鸞聖人に出会うことがなければ、この易行の教えに入ることができなかつたというわけです。

「しょうしんげ正信偈」の時にも説明しましたが、仏教を「易行」と「難行」に分けたのは、七高僧のお一人、インドのりゅうじゅぼさつ龍樹菩薩でした。そして仏教を「他力」と「自力」に分けたのが、やはり七高僧のお一人、中国のどんらん曇鸞だいし大師です。

仏教の主流は、「難行」すなわち出家して厳しい修行を重ねて自ら悟りを開くという、「自力」すなわち自分の力で救われようとする教えでした。親鸞聖人のお師匠さんである法然上人が仏教を変革して、阿弥陀さまの本願、すなわちすべての人をもらさず救うぞというお誓いを信じ、お念仏を称えることによって救われるという「他力」の教えを説かれました。

そして親鸞聖人自身のお言葉に依るべきであるのに、自分勝手な解釈によって親鸞聖人の他力の教えを乱すことに対する、唯円の強い憤りの心情がここでは書かれています。

③ よつて、こしんらんしょうにん故親鸞聖人のおんものがたり御物語のおもむき、みみ耳のそこ底にとど留まるところ所いささかこれをする。
どうしんぎょうじゃひとへに同心行者のふしん不審をさん散ぜんがためなりと。うんぬん云々。

(現代語訳)

そこで、今は亡き親鸞聖人がお聞かせくださったお言葉のうち、唯円の耳の底に残って忘れられないものを、少しばかり書き記すことにします。

これはただひとえに、同じ念仏の道を歩まれる人々の不審や疑問を取り除きたいからです。

「同心行者」は、同じ信心をもって念仏する人々のことです。「不審を散ず」というのは、疑わしいことをなくすことです。「云々」は、しかじか、という意味で、ことばを途中で省略するときに使います。

正しい信心と異端とを区別するよりどころは、親鸞聖人が日頃から繰り返し説かれていたお言葉であり、唯円の耳の底に焼き付いているお言葉を書き記して、これによって念仏する人々の間の不審を晴らしたいというのです。

各々の自分勝手な解釈を改めるために、親鸞聖人ご自身が語られたお言葉を、唯円が記憶している限り記しておこうとされたわけです。

もし仲間内でこれから不審なことや不明なことが起こってきたら、それを解決するには親鸞聖人ご自身が語られたお言葉以上のものはないのですから、親鸞聖人の「語録集」が必要だと唯円は考えたのだと思います。親鸞聖人のお言葉を後世の人々のために記録しておく必要があるという強い思いから、唯円は『歎異抄』を書かれたのです。

今回は第一条を読んでみたいと思います。